

立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）
プロジェクト研究（共同プロジェクト研究）
2016年度研究【経過・成果】報告書

| | | | | | | |
|------------------------------------|---|---|---|---|----|-------------|
| 研究代表者 | 所属部局・職 | | 氏名 | | | |
| | 社会学部・教授 | | 井川 充雄 印 | | | |
| 研究課題 | 戦後の〈ヤミ市〉がもたらした都市文化とメディアの表象に関する多角的研究 | | | | | |
| 研究組織 (研究代表者・研究分担者) 2017年3月現在 | 所属研究機関・部局・職 | | 氏名 | | | |
| | 立教大学・社会学部・教授 立教大学・文学部・教授 立教大学・現代心理学部・教授 立教大学・江戸川乱歩記念大衆文化研究センター・学術調査員 立教大学・ESD研究所・教育研究コーディネーター 法政大学・文学部・助教 自由学園・教授、立教大学・名誉教授 | | 井川充雄 石川巧 中村秀之 落合教幸 後藤隆基 山田夏樹 渡辺憲司 | | | |
| 研究期間 | 2015年度～2016年度 | | | | | |
| 研究経費※ (上段：支出金額) | 2015年度 | | 2016年度 | | 年度 | 総計 |
| | 3,000,000 | 円 | 3,000,000 | 円 | 円 | 6,000,000 円 |
| (下段：採択金額) | 3,000,000 | | 3,000,000 | | | 6,000,000 |

※1円単位で記入

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、敗戦によって食糧や物資の供給が少なくなり、人々が日々の暮らしにさえ困窮するなか、さまざまな都市に誕生した自由マーケット、いわゆる〈ヤミ市〉に焦点をあて、メディア研究、文学研究、映画研究、都市研究などの視点から〈ヤミ市〉の文化と表象を考察するものである。欲望の渦巻く〈ヤミ市〉の世界は混沌であると同時に新たな活力の源泉でもあった。〈ヤミ市〉を起点に広がった自由で柔軟な文化は、急激な経済復興を遂げていく日本社会にさまざまな影響を及ぼした。本研究は、研究代表者・分担者がそれぞれの専門分野から〈ヤミ市〉の世界を調査・探究・分析することによって、日本の大衆文化史を捉え直すことを目的とする。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ヤミ市] [都市文化] [メディア表象]

研究【経過・成果】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

〈ヤミ市〉とは、戦後の統制経済下において、公的に禁止された流通経路を扱う市場をさす。配給制度の破綻、取締り機能の弱体化と行政の黙認、戦時中の強制疎開にともなう駅前周辺にできた空地の存在などを要因として誕生したヤミ市は、一方で非合法の流通でありながら、同時に焦土と化した日本が復興していくための原点でもあった。GHQの占領政策はもとより、都市の再開発とそこに集う人々の文化に至るまで、〈ヤミ市〉は戦後日本の発展過程を考えるうえで極めて重要な問題を内包している。また、これまでの研究としては、松平誠が『ヤミ市—東京池袋』(ドメス出版)や『ヤミ市 幻のガイドブック』(ちくま新書)で試みた生活文化論からのアプローチをはじめ、東京都江戸東京博物館の調査報告『ヤミ市モデルの調査と展示』、橋口健二/初田香成の『盛り場はヤミ市から生まれた』(青弓社)、石博督和「闇市の形成と土地所有からみる戦後東京の副都心ターミナル近傍の形成過程に関する研究」(明治大学博士学位申請論文、2014年)などがあり、社会科学、建築学、都市工学の領域では同時代資料を活用した研究の蓄積がなされている。だが、戦後70年余りにわたって、〈ヤミ市〉がどのように描かれ語られてきたのかという研究に関しては、同時代の状況を知る人々によって記録された一部の証言を除いて実証的な研究がなされておらず、戦後混乱期におけるひとつの特異現象として理解しようとする通俗的な言説に覆われている。本研究は、そうした現状をふまえて、文学・映画・メディアにおける〈ヤミ市〉の表象分析を試みるものである。〈ヤミ市〉をめぐる数々の言説や表現を通して、占領下の混沌のなかで人々がどのようにして生き延び、新しい日本を作ろうとしたのかを探究しようとするものである。

上記のような研究方針のもと、初年度の2015年度には、各人がそれぞれの専門領域における個別の研究を行うとともに、以下の共同的研究活動を行った。

① 立教大学・東京芸術劇場・豊島区が共催する《池袋＝自由文化都市プロジェクト》を立ち上げ、2015年9月には東京芸術劇場ギャラリーにおいて「戦後池袋の検証—ヤミ市から自由文化都市へ—」という展示企画を行った。この展示の企画、構成、解説は共同研究メンバーが中心となっており、戦災で壊滅的な被害を受けた池袋の復興と巨大繁華街の誕生を検証した。具体的には、(1)東京ヤミ市マップ、(2)ヤミ市とその実態、(3)灰の中からの脱出—城北大空襲後の暮らし—、(4)戦後池袋の光景①GHQ占領期、(5)戦後池袋の光景②復興から高度経済成長期へ、(6)カストリ雑誌、(7)戦後マンガ文化、(8)人世坐(1948—1968)人の世をうつした映画の光—といったコーナーを設け、それぞれの担当責任者が独自の展示を行った。また、この展示に先立って、吉見俊哉、マイク・モラスキー、川本三郎氏を迎えたシンポジウムを開催し、〈ヤミ市〉からの発展という観点で戦後池袋の変遷を追い、上記の企画展の内容を紹介した図録も作成した。

② 2015年9月に雑誌『東京人』(都市出版)が試みた特集〈ヤミ市を歩く〉と連携し共同研究メンバーの石川、中村、後藤の三名がそれぞれ、「カストリ雑誌異聞」(石川)、「ヤミ市映画」(中村)、「額縁ショー」の流行」(後藤)を執筆している他、渡辺憲司が豊島区庁・高野之夫にインタビューした「池袋—繁華街を支え、ともに息づく」も掲載されている。

研究【経過・**成果**】の概要 つづき

2年目となる2016年には、それまで各自が行ってきた個別領域の研究をまとめる作業を行った。その結果、建築史の専門家やポスドクや院生などの若手研究者にも加わってもらい、メンバー全員が執筆した研究書『〈ヤミ市〉文化論』を、2017年2月にひつじ書房から刊行した。内容は以下の通りである。

「はじめに」(井川充雄)では、本書の概要を記した。

本書第I部では、前述のシンポジウム「戦後池袋の検証 ―ヤミ市から自由文化都市へ―」の様相を採録した。また、「一九四五年吉原雑記」(渡辺憲司)では東京の歓楽街・吉原の変遷を扱った。

第II部「都市とメディア」では〈ヤミ市〉の成立から解体までの経過をたどった。この中で「都市としての闇市」(初田香成)では新橋の事例を中心に東京の〈ヤミ市〉の誕生から終焉までの過程をたどり、都市としての〈ヤミ市〉を成り立たせていた要素を〈ヤミ市〉の推進力と〈ヤミ市〉の伝統的基盤から論じた。「民衆駅の誕生―国鉄駅舎の戦災復興と駅ビル開発」(石樽督和)では、豊橋駅と池袋駅などを題材として、国鉄の駅の復興における「民衆駅」の誕生の経緯を明らかにした。「読売新聞による「新宿浄化」キャンペーン―ヤミ市解体へのエール」(井川充雄)は、新宿を舞台に〈ヤミ市〉解体へ向かう局面での全国紙・GHQ・警察・地元紙等の各アクターの政治的せめぎ合いを扱った。

第III部「ヤミ市の表象」では、戦後の日本文化の中で〈ヤミ市〉がどのように表象されてきたかをメディア別に取り上げた。すなわち、「敗戦後日本のヘテロトピア―映画の中のヤミ市をめぐる」(中村秀之)は占領期から一九七〇年代までの映画を取り上げた。つづく「小説テキストにおける闇市・闇屋の表象」(渡部裕太)は占領期における小説を詳細に分析した。そして「石川淳「焼跡のイエス」から手塚治虫、梶原一騎、王欣太「ReMember」―戦後マンガにおける闇市の表象分析」(山田夏樹)は敗戦から今日までのマンガを扱った。それぞれの章では、個別のメディアにおいて、〈ヤミ市〉がどのように表象され、それがどのように変化していったのかをそれぞれの視点から明らかにした。

第IV部「風俗と表現」では、〈ヤミ市〉を起点に広がった戦後の自由で柔軟な文化の広がりを多元的に取り上げた。「占領期東京の小劇場・軽演劇・ストリップ」(後藤隆基)は小劇場を中心とした軽演劇を扱った。「占領期のカストリ雑誌における原爆の表象」(石川巧)は小説に描かれた原爆のイメージを通して戦後の世相と日本人の敗戦認識を明らかにした。「昭和二〇年代の探偵小説―『宝石』の作家たちと新宿」(落合教幸)は江戸川乱歩らが関わった雑誌『宝石』を中心に戦後の探偵小説の復興過程をたどった。「映画『君の名は』(一九五三～一九五四)論―戦後的メロドラマの通俗性と感傷性」(河野真理江)は、戦後大ヒットした映画『君の名は』を題材に戦後の大衆文化の一側面を明らかにした。

本書の刊行後の2017年3月3日には、関係者による合評会を行った。合評会には、外部講評者として早稲田大学教授の橋本健二氏(社会学)、日本映画大学教授の川崎賢子氏(文芸・演劇評論家、日本近代文学)を招き、忌憚ないコメントを頂戴した。これにより、個別論文の課題や今後の研究の方向性について議論を行うことができた。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①~④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文(著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書(著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催(会名、開催日、開催場所)
- ④その他(学会発表、研究報告書の印刷等)

- ①雑誌論文(著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- 石川巧「谷崎潤一郎と占領期文化—雑誌「国際女性」との関わりから—」五味渕典嗣・日高佳紀編『谷崎潤一郎読本』翰林書房、2016年12月
- 石川巧「解説「手帖抄」—日本人を叱る原節子」『新潮』114(1)、2017年、230~236ページ
- 落合教幸「江戸川乱歩の創作ノート(昭和三十年)—「化人幻戯」「影男」「月と手袋」『十字路』と少年探偵」『大衆文化』15号、2016年、55~87ページ
- 後藤隆基「都市における地域学としての「池袋学」の可能性(一)—立教大学と東京芸術劇場による地域連携の実践」『大衆文化』15号、2016年、17~34ページ
- 山田夏樹「三島由紀夫「鏡子の家」における現在性—「時代の壁」の解体」『文学・語学』216号、全国大学国語国文学会、2016年8月、26~38ページ
- ②図書(著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- 井川充雄・石川巧・中村秀之編、ひつじ書房、『〈ヤミ市〉文化論』、2017年、321ページ
- 中村秀之、岩波書店、『特攻隊映画の系譜学—敗戦日本の哀悼劇』、2017年、312ページ
- 山田夏樹、青弓社、『石ノ森章太郎論』、2016年、253ページ
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催(会名、開催日、開催場所)
- ④その他(学会発表、研究報告書の印刷等)
- 石川巧「戦後池袋—ヤミ市から自由文化都市へ— 展示企画展報告」『大衆文化』14号、2016年、2~20ページ
- 石川巧「雑誌「月刊毎日」と石川達三「沈黙の島」(高麗大学中日言語文化学科 BK21Plus 事業団招待講演、2016年8月24日、高麗大学校)
- 石川巧「占領期カストリ雑誌の現在」(韓国日本学会 第93回学術大会〔特集・東アジアと人文学の精神〕招待講演、2016年8月26日、嘉泉大学校)
- 石川巧「カストリ雑誌研究の現在」(20世紀メディア研究会 100回記念「雑誌に見る占領期—福島鑄郎コレクションをひらく」国際シンポジウム、2016年9月18日、早稲田大学)
- 石川巧「戦後占領期の福岡から巣立った作家たち」(「近代文芸の百年 近代文学と九州・沖縄」、2016年11月12日、早稲田大学エクステンションセンター)
- 落合教幸「旧江戸川乱歩邸特別公開 —〈池袋=自由文化都市プロジェクト〉」『大衆文化』14号、2016年、57~60頁
- 後藤隆基「池袋の戦後史をめぐる〈場〉とにぎわいの創出 —「池袋=自由文化都市プロジェクト」にみる大学の地域連携の道筋」『大衆文化』14号、2016年、45~56ページ
- 後藤隆基「池袋演劇史の里程標—〈ヤミ市〉時代からの出発—」(池袋学秋季第2回「池袋は”演劇都市”になれるか—その過去・現在・未来—」2016年10月29日、立教大学)
- 山田夏樹「三島由紀夫と北杜夫—南米移民を視座として」(2016年度法政大学国文学会、2016年7月23日、法政大学)
- 山田夏樹「〈3・11〉とサブカルチャー表象」(第56回立教大学日本学研究所研究例会、2016年9月17日、立教大学)